

台湾訪問記

平 川 東 亜

「おとといの夕食のメニューを覚えていますか」というテレビコマーシャルがあったが、おとといの夕食どころか、昨日の夕食のメニューすら覚束ない筆者に、4ヶ月以上前の台湾訪問をどこまで正確に思い出せるか甚だ心もとないのだが、正確な記述は同行の諸氏にお任せすることにして、手許に残された日程表などを頼りに、筆者なりの責を果たすことにしたい。

3月12日(日)、加藤茂夫団長をはじめとする台湾企業調査団の一員として、成田を発って午後桃園空港に到着した。中国と台湾との歴史的緊張関係が頭にあったせいも理由もなく、空港の位置は台湾の北端か若干太平洋寄りなどと勝手に思い込んでいたのだが、意外にも完全に大陸側だった。空港のあちこちにある広告の文字も中国ほど「略字化の程度」はひどくないような気がした。それでも「勞力士(ローレックス)」には恐れ入った。同行の池本教授によると、外来語の当て字の仕方には「音」と「訓」があるようで、ホット・ドッグは「温犬」だそうだ。

空港から故宮博物館へ向かった。山の麓から中腹にかけて展示館が並んでいた。北京のそれと比べて、全体の規模は大きくないようだが、展示物はこちらのほうが上らしい。日本統治時代の教育を受けたというガイドの洪さんはなかなかの博識で、現在の東京の事情にも詳しく、台湾の歴史についてもいろいろ話してくれた。太平洋戦争のときに日本軍として勇敢に戦ったことで知られる「高砂族」については筆者も話は聞いていたが、彼らは台湾に住み着いた海洋民族の一つで、商売で大陸から渡ってきた華人が原住海洋民族に加わり、混血してできたのが原台湾人であるらしい。その後日本の統治時代を経て、戦後

は、蒋介石の国民党統治から始まり今日至っているということだった。日本の統治時代や蒋介石の時代と比べて、現在の台湾は治安が悪く誘拐などは毎日のように起こっているが、治安機関は頼りにならず、金で解決することが多いのであまり表ざたにはならないという話だった。

翌13日(月)は銘傳大学<ミンチュアン>大学を訪問した。元は女子の商業学校だったそうで、規模は本学と同程度である。本学の生田校舎と同様、キャンパスは小高い丘の傾斜地にあった。キャンパスは全部で3ヶ所あるそうで、そのうちの一つは金門・馬祖の馬祖島にあると聞いて驚いた。かなりの人数の、日本語学科の大学院生が付き添ってくれ、キャンパス見学の手助けしてくれた。実務教育に力を入れている大学で、英語は4年間必修だそうだ。放送界に多くの人材を送り出している大学でもあり、立派な放送実習室を見学させてもらった。放送室にいるわれわれをまったく別の空間にいるかのように見せる、合成画像を作って見せてくれた。キャンパスの中に、実際に大学関係者や来客が宿泊できるホテルがあり、業務用の清楚な制服姿で実習中の女子学生がわれわれ一行を迎えてくれた。同行の小島教授は生田校舎と伊勢原との間のネット授業でも計画しているのか、同大学の遠隔地授業に強い関心を示しておられた。

夜は専修大学のOB会があった。定刻になってもなかなか人が集まらなかったもので、同行の誰かが「“台湾時間”というのがあるんですか？」と訊いた。すると長老のOBが、「日本の統治時代にはどんな集まりでも、5分前には全員が揃ったものだ。こんなになったのは、蒋介石一派が来てからだ」と言った。彼によると、「蒋介石一派」は、まだ人数の少ない早い時間帯には暗殺の恐れがあるので、大勢が集まったところにやって来るのだという。それで、だんだん、集まりに時間がかかるようになったということらしい。

14日(火)は耐斯(ナイス)企業集団を訪問・見学した。食品・飲料から化学・ホテル・運輸・金融・保険まで巾広く手がける陳一族の企業グループである。午後は台北市政府建設局で説明を受け、質疑応答の後、内湖科技園区内を見学した。大陸の中国でも感じたことであるが、日本と比べて多くの若い人た

ち、特に若い女性が政府機関や企業の重要ポストについていることが印象的だった。また台湾にいる間、筆者はしばしば大陸の北京か上海あたりにいる錯覚に陥ったが、街中に中国語の看板があふれ、まわりから聞こえてくるのは中国語ばかりであったから、それはいたし方ないとしても、とんでもない勘違いをしたのは内湖科技園区内の台和園芸でのことである。そこは各種の花、特に見事なランを栽培して国内各地に出荷するだけでなく、日本にも輸出しているとのことだった。その一角に立派なセリ市場があり、そこでセリのやり方や売買規模について説明を受けたとき、一瞬「資本主義とどこが違うんだ！」という思いに駆られてしまったことだった。

最後に、心残りのことは時間の都合で、当日予定していた円山大飯店行きが中止になってしまったことである。円山大飯店は旧台湾神社の跡地に、蒋介石夫人の宋美麗が建設・経営に当たった中国式宮殿風の大ホテルだそうで、台北市街のどこかちでも遠望できる。訪台中、われわれはその近くを何度か往復し車窓から間近に見ていたのも、そこでお茶でも飲もうと楽しみにしていたのである。

<2006.07.22.記>